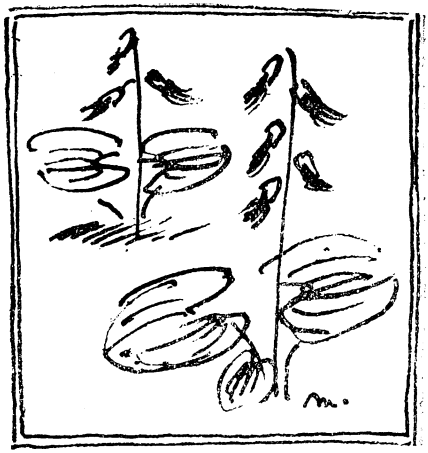
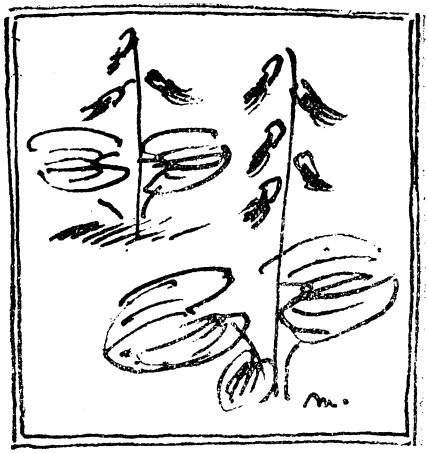


二人の母親

田山花袋

大勢の中でちよつと顔を見合せた時から、おまさは、「田上さんだな」と思つた。と、無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てて逢つて見ると、おまさは何か口を利いて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、背の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髪に、茶色がゝつたお召の羽織を着て、黒繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い背、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。

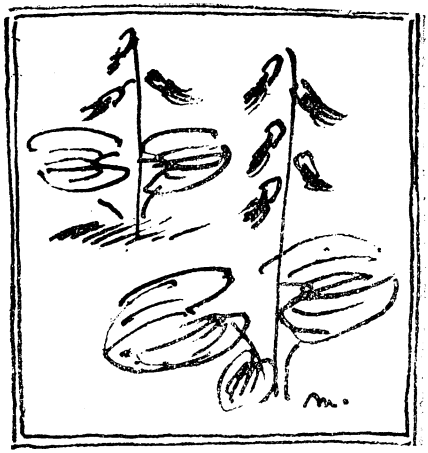


二人の母親

田山花袋

大勢の中でちよつと顔を見合せた時から、おまさは、「田上さんだな」と思つた。と、無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てて逢つて見ると、おまさは何か口を利いて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、背の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髪に、茶色がゝつたお召の羽織を着て、黒繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い背、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。

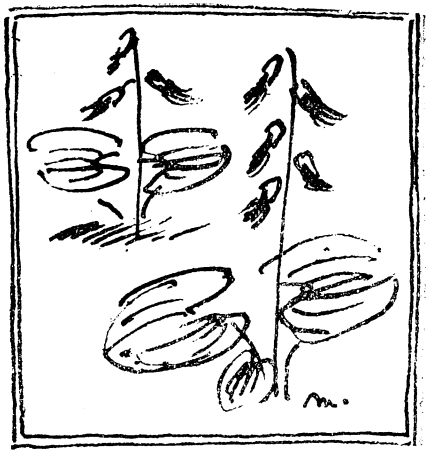


二人の母親

田山花袋

大勢の中でちよつと顔を見合せた時から、おまさは、「田上さんだな」と思つた。と、無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てて逢つて見ると、おまさは何か口を利いて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、背の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髪に、茶色がゝつたお召の羽織を着て、黒繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い背、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。

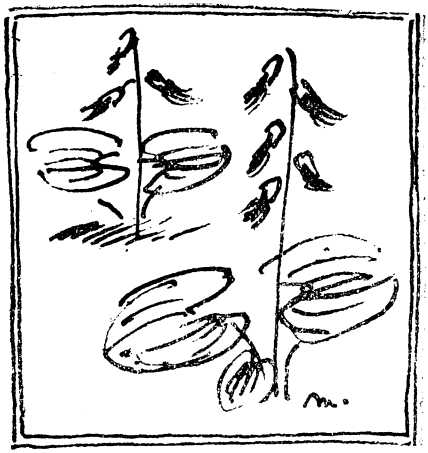


二人の母親

田山花袋

大勢の中でちよつと顔を見合せた時から、おまさは、「田上さんだな」と思つた。と、無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てて逢つて見ると、おまさは何か口を利いて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、背の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髪に、茶色がゝつたお召の羽織を着て、黒繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い背、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。

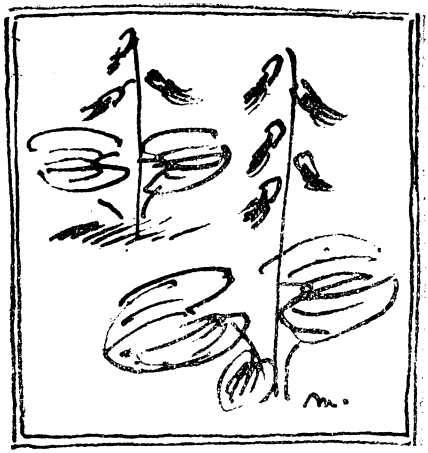


二人の母親

田山花袋

大勢の中でちよつと顔を見合せた時から、おまさは、「田上さんだな」と思つた。と、無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てて逢つて見ると、おまさは何か口を利いて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、背の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髪に、茶色がゝつたお召の羽織を着て、黒繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い背、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。

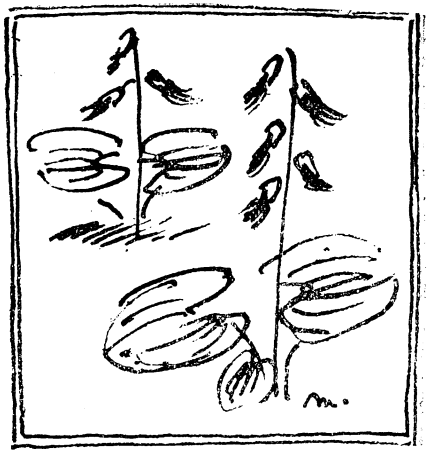


二人の母親

田山花袋

大勢の中でちよつと顔を見合せた時から、おまさは、「田上さんだな」と思つた。と、無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てて逢つて見ると、おまさは何か口を利いて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、背の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髪に、茶色がゝつたお召の羽織を着て、黒繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い背、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。

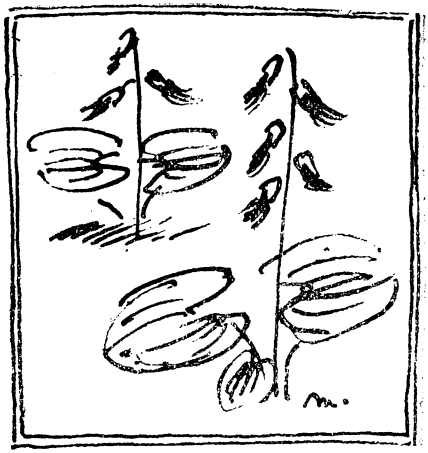


二人の母親

田山花袋

大勢の中でちよつと顔を見合せた時から、おまさは、「田上さんだな」と思つた。と、無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てて逢つて見ると、おまさは何か口を利いて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、背の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髪に、茶色がゝつたお召の羽織を着て、黒繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い背、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。

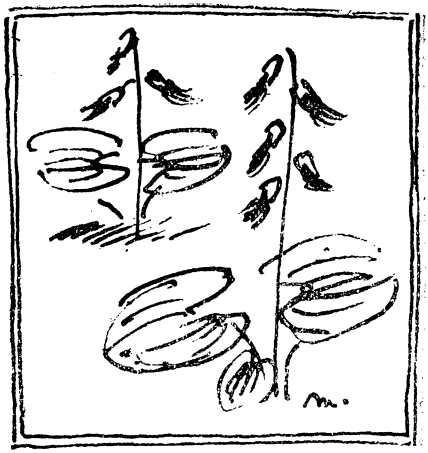


二人の母親

田山花袋

大勢の中でちよつと顔を見合せた時から、おまさは、「田上さんだな」と思つた。と、無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てて逢つて見ると、おまさは何か口を利いて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、背の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髪に、茶色がゝつたお召の羽織を着て、黒繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い背、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。

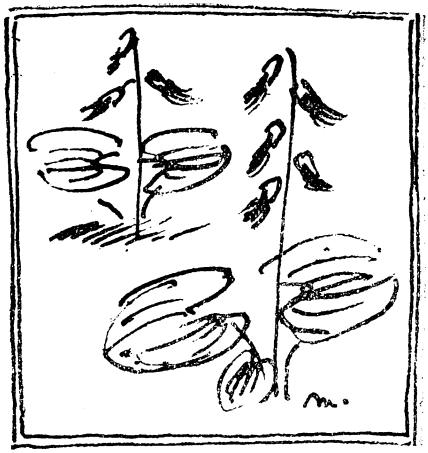


二人の母親

田山花袋

大勢の中でちよつと顔を見合せた時から、おまさは、「田上さんだな」と思つた。と、無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てて逢つて見ると、おまさは何か口を利いて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、背の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髪に、茶色がゝつたお召の羽織を着て、黒繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い背、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。

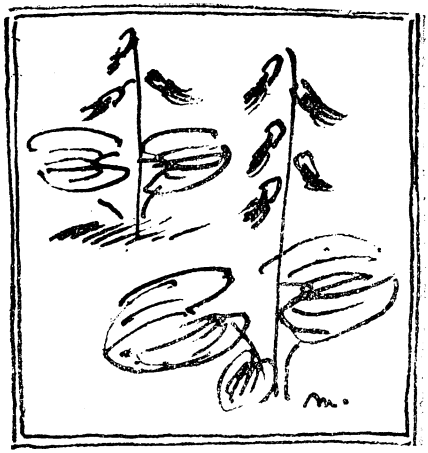


二人の母親

田山花袋

大勢の中でちよつと顔を見合せた時から、おまさは、「田上さんだな」と思つた。と、無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てて逢つて見ると、おまさは何か口を利いて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、背の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髪に、茶色がゝつたお召の羽織を着て、黒繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い背、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。

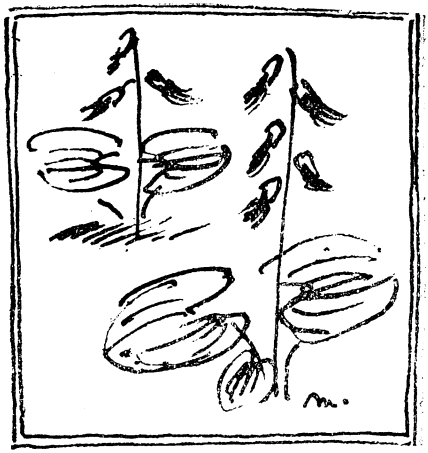


二人の母親

田山花袋

大勢の中でちよつと顔を見合せた時から、おまさは、「田上さんだな」と思つた。と、無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てて逢つて見ると、おまさは何か口を利いて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、背の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髪に、茶色がゝつたお召の羽織を着て、黒繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い背、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。

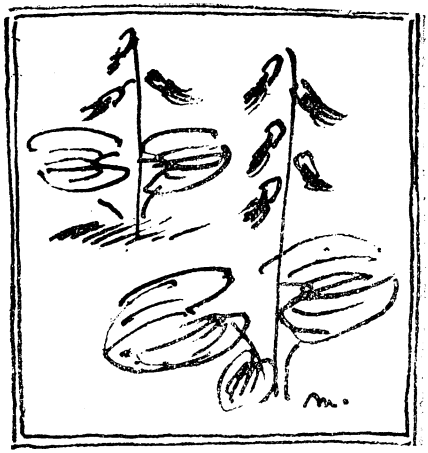


二人の母親

田山花袋

大勢の中でちよつと顔を見合せた時から、おまさは、「田上さんだな」と思つた。と、無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てて逢つて見ると、おまさは何か口を利いて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、背の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髪に、茶色がゝつたお召の羽織を着て、黒繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い背、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。

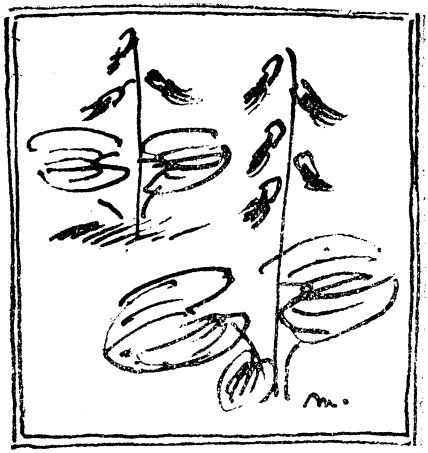


二人の母親

田山花袋

大勢の中でちよつと顔を見合せた時から、おまさは、「田上さんだな」と思つた。と、無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てて逢つて見ると、おまさは何か口を利いて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、背の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髪に、茶色がゝつたお召の羽織を着て、黒繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い背、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。



二人の母親

田山花袋

大勢の中でちよつと顔を見合せた時から、おまさは、「田上さんだな」と思つた。と、無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てて逢つて見ると、おまさは何か口を利いて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、背の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髪に、茶色がゝつたお召の羽織を着て、黒繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い背、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。